

9. 高大接続事業

本年度から全学教職センターでは、高大接続事業に取り組んでいる。その第一弾として、平成30年2月17日には、教育学部2Fのプレゼンテーションルームで「県北『地域おこし』教育実践プログラム」として、「ワークショップ」と「シンポジウム」を行った。このプログラムの目的は、近年の教員志望者の減少傾向に対処するため、これから大学進学を検討する高校生を対象に、教師という職業の魅力や興味を喚起する教育活動を行うことであった。

まずワークショップでは、茨城県の県北地域に位置する大子清流高等学校、小瀬高等学校、常陸大宮高等学校の30人の高校生に参加してもらい、県北地域の活性化を図るPRの動画を作成し、プレゼンテーションを行った。参加した高校生たちは、当日まで各自の高校以外の生徒とは初対面であったが、すぐに打ち解けた雰囲気になりワークショップに熱心に取り組んでいた。より具体的には、各高校から10人ずつの生徒が参加し、7つのグループに分かれ、「食」「観光」「歴史」といったテーマで、茨城県北地域をPRする1分程度の動画制作に取り組むものである。動画は小中学生に観てもらうことを想定して作り、制作にあたっては多くの小中学校現場でも活用されている「ロイロノート」というiPadアプリケーションを使用した。生徒たちは、各校の教員やTAとして参加した茨城大学の学部学生と教職大学院の院生らのサポートも受けながら、活発にアイディアを出し合い、動画を仕上げていた。

午後に行われたプレゼンテーションでは、常陸大宮高等学校の長島利行教頭の進行のもと、常陸大宮市でブルーベリー農園の運営など食に関わる取り組みを進めている小口弘之氏、茨城大学人文社会科学部の西野由希子教授、県教育庁の石井純一高校教育課長といったゲスト講師らに向けて完成した動画を披露し、工夫した点や込めた思い、感想などを発表した。7つの動画はいずれも、ターゲットである小中学生の視点を意識した構成、ナレーション、画像のアレンジの工夫が施されており、各自の高校を超えた生徒たちの交流が短時間の間に深まり、互いに持ち寄った情報やアイディアを活かして制作に取り組んだことが伝わる内容となった。

「歴史」をテーマに、ユーモアと明るさの溢れる動画を作成した班の大子清流高校の大高未来さんは、「初めて会ったメンバーで最初は壁もあったが、だんだんと同じテンションをもっていることに気付き、和気あいあいと作れた。楽しんでもらえて良かった」と振り返った。また、子どもたちが興味をもつスイーツの情報を楽しい雰囲気で紹介する動画を発表した班の宇留野稜さんは、「自分は水戸在住で県北地域のことは良くわからなかったが、今回の動画作成で魅力を知ることができた」と感想を述べた。会場で生徒たちの動画を鑑賞し、発表を聞いた教師からは、「お互いがお互いを信じあう姿が見られ、尊重しあえることの素晴らしさを感じた。工夫された動画を見て、自分も『こういう構成の授業ができれば』と思った」など、高校生たちの協働活動による作品の出来栄を評価する声が聞かれた。

本センターでは、以上のような事業の取り組みは初めてであったが、現役の高校生たちには協働して活動する面白さ、出来た作品を伝えることの喜びを十分に味わえる活動になったようだ。このような事業は、入試関係と関わる高大接続事業とは一味違ったものであ

り、教師の魅力を高校生に伝えるものとしてはユニークな試みになった。来年度以降も是非継続していきたい。



シンポジウムでのやり取り



高校生たちのプレゼンテーションの様子